

# 槐 かい

平成29年8月号

岡井省二創刊

平成二十九年八月一日発行 第二十七巻第八号 池田勇一（創刊）一冊目 四（日発行）  
平成二十九年九月十八日第二種郵便物の認可

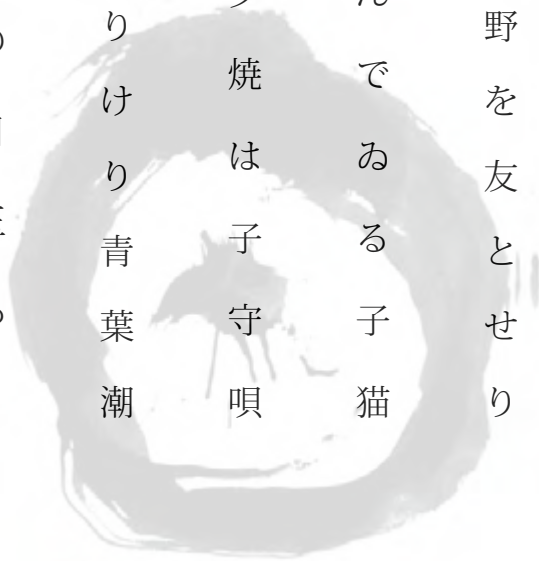


# 私の目玉

高橋将夫

伸び縮みする一枚の夏の海  
時の日の時を忘るる遊びかな  
女めの子にも男おの子の匂ひ菖蒲風呂  
菖蒲湯の菖蒲を巻いて河童の子

小槌振り何も出てこぬ子供の日  
震災の国に原子炉子供の日  
父の日は一人山野を友とせり  
自らの影と遊んでゐる子猫  
朝焼はジャズ夕焼は子守唄  
心にも満ち干ありけり青葉潮  
箱庭の空に私の目玉あり



# 槐賞受賞作品二十句

江島照美

明日がある雪割草の咲く道に  
多喜二忌や未完の完もありにけり  
耕して耕してまた耕せり  
形から入る生き方遍路道  
哲学も無学も楽し花の道  
春光は人の心を操れり  
形代は息かけられて骨抜きに  
竹皮を大胆に脱ぎ天めざす  
油虫まさかばかりが人生よ  
空蟬や見えぬからこそ見ゆるもの

すててこや消えぬ訛のいとほしく  
白粉の花向かうに私がある  
いじめられ愛されている猫じやらし  
銀蘭は金蘭の美と競はざる  
魅了する台風の目のやうなひと  
赤い羽根つけてやさしい顔をする  
牡丹焚く炎は人を狂はせる  
名人は目立たぬ人よ紙を漉く  
古代には巨石文明雪達磨  
格別な人生はなしちゃんちんこ

# 槐安集

水野恒彦

風光る中に捉へし愛ひとつ  
芽花流しに鏡がひとつ落ちてゐた  
墓ひま歩くことば置きゆくごとくにて  
葉桜のなかは流沙の音がする  
呼び戻す過去などなければ夏野ゆく

加藤みき

雄鶏のひねもす鳴けり椎の花  
そつと吹き戴く緑茶汗あまた  
青梅の香り満ちをり恐ろしき  
サイダーや最高気温更新す  
夏落葉天満天神宵宮なり

中島陽華

齋いもひせし千字文あり鳥雲に  
約束の天津にあり花ミモザ  
よき地合鮑の唇の動きをる  
それやそれ鹿尾菜の白和へてんこ盛  
釘と紐持てばデカルト春の月

竹内悦子

神鳴や犀一頭が動き出す  
本に天と地枇杷の実の青々と  
著莪群るる天鈿女と田力男  
蟻穴にどの目ン玉も黒真珠  
御結びと五月の神と遊行かな



雨村敏子

母の日の金輪際の赤ひらく  
何なくて柿若葉柿若葉かな  
國東の青葉のいろと思ひける  
水汲んで八十八夜の空のあり  
晩節へ脱皮の途中更衣

本多俊子

火の国の喉やはらかき雨蛙  
砂の上タクラマカンの蜥蜴かな  
はんざきの星のやうなるその眼  
幸せはゆつくりと来い浮いて来い  
墓ないて太子の眼春いづこ

近藤喜子

芍薬に触れ父のたましひに触る  
林中の靈氣をまとひ黒揚羽  
芥子坊主となりて途方に暮れてをり  
草笛や心の濡れてくる夕べ  
深き森の奥へところ青葉木菟

瀬川公馨

男装の麗人たりき麦の穂ぞ  
麦秋や黒穂一節手折りたる  
山藤の蔓の氣儘に遠出かな  
芽柳や檀波羅蜜の真つ最中  
頓挫してとどのつまりが葱坊主

久保東海司

蚊柱の別の柱と相和せず  
野水仙潮の流れを見て育つ  
菰の中火種の如き牡丹の芽  
水着より水美しくしたたらす  
一羽去り一羽となれば海猫ごめの鳴く

柳川 晋

冷淡な夜に抱かれ夏に入る  
緑蔭やゲッターの檻見えはじむ  
白玉や吐(つ)くかもしれぬ嘘の数  
主義主張なく盛り上がる雲の峰  
バブルとは何だったのか蚊喰鳥

熊川 暁子

里山は笑ひ遠山は微笑めり  
白魚のたましひ一寸宙にらむ  
一色でぐんぐん描く森若葉  
河鹿笛きつと美人に違ひなし  
五月闇玻璃の向かふは無限界

寺田 すす江

海境のひかり八十八夜かな  
古墳塚護りさつきの燃え立ちぬ  
蓮浮葉昼からの雨けぶりけり  
中空のあたりナンジャモンジャ咲く  
一湾に注ぐ卵の花腐しかな

岩下芳子

どこまでも歩いて行かむ大千瀾  
筆太の沙門の大書夏座敷  
大手門へ続く大道槐咲く  
利かぬ気の旋毛は二つ夏帽子  
丸四角刈られし形に躑躅咲く

近藤紀子

春落葉思はぬかさのありにけり  
五体に染む女院御所のをもみぢ  
古ベンチ花蕊のせて動かざる  
筍や赤き山土つけしまま  
指に痛き山帰来の花いけてをる

岩月優美子

ポピー揺れ彼方に白きクルスかな  
こんな世はひたすら緑追ひ求む  
馬磨く少女二人や若葉風  
鶉篝や水の底まで炎上す  
五月闇潜みてをりし魔物かな

竹中一花

樹の枝に夢を吊るしてハンモック  
龍笛の玄き音色や薪能  
裏山の志士の道飛ぶ尉鶉  
草の風春にさよならする匂ひ  
ジョーカーを引いて笑うてわらび餅



前田美恵子

躑躅燃ゆ妖怪のをり本能寺  
大木に幾つもの空(うろ)立夏かな  
黄砂降る虚飾の街の出現す  
静かなる時を得たるや合歓の花  
夜振火や小島の姿現はにす

中田禎子

暁闇の風初夏の湿りあり  
山清水葉の器もて賜りぬ  
万緑や大和三山卑弥呼ゐて  
車座の真中に来たる黒揚羽  
メーデーや歌声喫茶とポプデイルン



# 槐市集

有松洋子

落し文神の啓示はそつと来る  
想を練る沙翁の独語木下闇  
百合花粉真夜に触れば呪誼となる  
万緑の上へと集ふ白き雲  
答へなど出さずとも良し風薫る

犬塚芳子

明易や中空いつもからりとす  
あづまやに腰を預けて菖蒲かな  
長閑なる山の声あり人の事  
メタセコイヤ涼しき風が素通りす  
なめくじり木の葉の上でなにをする

犬塚李里子

十字架を見上げ青蔦登りゆく  
万緑やマリアの如く赤子抱く  
尺蠖の宙より降りて地を計る  
浦島草何をか釣らむ糸伸ばし  
小満の夜揚羽蝶翅たたむ

井上静子

何処からかハープの音色藤の花  
たかななの素肌まぶしき日本晴れ  
子が我の丈に踏みつつじかな  
茄子植う忌地しないか土に聞く  
黒髪の巫子の舞ひけり春の虹



今井 充子

一本の桜にちなむ物語

春の暮ドラマに共感してゐたり

玉手箱に集ふ顔顔花咲けり

玉手箱 伊集院

同窓や久しき弾み花の午後

大振りの威風堂々桜かな

岩田 洋子

夜明けより東に向かふ柿若葉

五月雨に杭打つ音や稚魚跳ねる

落人の拓きし道や滝の音

姫神へ振り向き走る青蜥蜴

約束はあつてなきもの朧月

植木 戴子

日の匂ひ藤の匂ひや山の晴

山あいの雲の浮びし蕨狩り

柿若葉酢の効いてをるマリネかな

走り梅雨サラダにかける粉チーズ

葉桜になんの鳥来る薄暮かな

江島 照美

百本の百合に溺れて母は逝く

来世乞ふ女人高野の余花の雨

引率の先生若し美容柳

龍穴の魂を動かすはたた神

よつこいしよ幼の言うて若葉風

岡田 桃子

プラットホーム残り立夏の道の駅

ノトキリシマの赤に染まりし能登半島

はつなつの白山荒き筆遣ひ

赤座布を咬みし昼餉の獅子頭

山車八基揃ふ殿様お国入り

荻 布 貢

灯台の光のリズムあいの風

海の幸ににぎはふ初夏の富山湾

湾越しに夏の立山浮かびをり

釣人の大物狙ひ蜚気楼

虎が雨勝ちが逃げゆくノーゲーム

# 槐集

## 高橋将夫選

役に立つ喜び代田へ水急ぐ 大阪 有松 洋子

急がずに育む愛も蔓薔薇も  
病状を筆圧で知る薄暑かな

友人院

百合の香にて窒息といふ自死ありや  
虹立ちぬ形見の帯の長さほど

概念の壊さるるもの白苺

江島 照美

竜天に登り漂ふ漫ろ神  
きつと会ふまた会えるよと一夜酒

鯉幟棟から棟を泳ぎきり

新緑の闇より生れし生命かな  
人生や車窓過ぎゆく花のごと

藤田美耶子

ルノアールの少女と連弾春の宵  
薫風や画布に一と刷け光のす

せせらぎに朝のあいさつ四十雀  
想念のこぼれ落ちたる花の渦

合掌の指に隙なし青葉闇 大阪 平野 多聞

小粒でも波長の長き山椒の実  
まつさらの命樽浮く海びらき

どの窓も未来へひらく麦の秋  
振花をほどきふる里遠くする

夏鶯何と楽しき傘寿かな 枚方 中 貞子

本性を持ちて咲き初む茄子の花  
牡丹の崩れしのちの静けさよ

ジャスミンの夜は華麗に舞踏会

心に灯ともして進む蝮の道  
風炉先のかな文字匂ふ夏衣 岡崎 吉田 順子

天平の双塔なりし牛蛙  
異次元を知つてゐるかに青葉木菟

竹皮をぬぎ青雲のこころざし  
白薔薇そのひとひらの音に散る

# 銀河往来 ◆槐集観照

## 高橋将夫

役に立つ喜び代田へ水急ぐ 有松 洋子

「田水張る」という季語がある。水で満たされ、「代掻」が終わり、田植の準備が整った田んぼが「代田」。田植が済めば「植田」。掲句は、今まさに水が田んぼへ流れ込もうとしている情景。水は稲を育てる喜びから、つつい先を急いでしまう。水の早い流れが目には浮かぶ。ともかく、人の役に立つことは嬉しいことである。人の笑顔を見ると自分もうれしくなる。

〈急がずに育む愛も蔓薔薇も〉の句は、掲句とは逆に「急がず」である。蔓薔薇はゆっくり伸びて花を咲かせ、愛はゆっくり育むものだという。

〈虹立ちぬ形見の帯の長さほど〉の句、虹は未完の円だが、その長さを「形見の帯」とみた感性が素晴らしい。

概念の壊さるるもの白苺 江島 照美

苺は赤いもの。それが白となると、苺のイメージが壊れてしまう。もはや苺だけでは苺の概念は伝えきれないといえよう。白い苺は苺という季語の本情にも係わる。

〈竜天に登り漂ふ漫ろ神〉の句はいかにも俳諧。「漫ろ神」は何となく人の心を誘惑する神。

薫風や画布に一と刷け光のす 藤田美耶子  
「光のす」の措辞に注目。まるで、光を描く印象派の名画を見るような気分させられる一句。

〈ルノアールの少女と連弾春の宵〉と〈せせらぎに朝の挨拶四十雀〉と〈概念のこぼれ落ちたる花の渦〉の句、いずれもこの作者ならではの感性が十分發揮された作品と思う。

合掌の指に隙なし 青葉 闇 平野 多聞  
「指に隙なし」が青葉闇の中で心を込めてしつかりと合掌する作者の思いを伝えている。

〈小粒でも波長の長き山椒の実〉は「波長の長き」が、〈まつさらの命樽浮く海ひらき〉は「命樽」が、〈どの窓も未来へひらく麦の秋〉は「未来へひらく」が効いている。

〈振花をほどきふる里遠くする〉の句、やはり振花はほどかない方がよさそうだ。

心に灯ともして進む蠅の道 中 貞子  
黙々と田んぼを這う蠅の心にも灯がともっているという。蠅を見る目にはやさしさがある。私の句集「蠅の道」への挨拶も込められているのだろうが、しつかりと一句が独立している。

〈本性を持ちて咲き初む茄子の花〉と〈牡丹の崩れしうちの静けさよ〉の句には、それぞれこの作者ならではの視点がある。〈夏鶯何と楽しき傘寿かな〉、〈ジャスミンの夜は華麗に舞踏会〉はおおらかで、めでたい。

白薔薇そのひとひらの音に散る 吉田 順子  
白薔薇が散っただけの景だが、「ひとひらの音に散る」の表現が巧み。〈以下略〉